

1 2月7日（日）主日礼拝レジュメ

「インマヌエル～神が私たちとともにおられる～」マタイの福音書1章18～25節

2 2節「主が預言者を通して語られたこと」とは、預言者を通して主が語られたということであり、それらの約束が主によって成就した。

この1章23節は、イザヤ書7章14節の引用。(旧約聖書 p 1178)
紀元前740年にウジヤ王が死んだ後、ヨタムが王になったが、わずか5年で亡くなり、紀元前735年にその子アハズが20歳で王位に就いた。当時アッシリアの圧制に苦しんでいた北イスラエル王国とアラムはこれを機会に南のユダ王国とともに三国軍事同盟を結んでアッシリアから独立しようと計画し、アハズ王に使者を送って誘いをかけた。ところがアハズ王がこれを拒否したので、アラムとイスラエルがいっしょになってエルサレムに攻め上ってきた。人々は、そのことを非常に恐れて「王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ」（2節）そして主はイザヤを遣わし、アハズ王を励まそうとした。アハズ王に11節「あなたの神、主に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも」と言い、さらに信仰を増し加えようとしてくださった。しかし彼は「私は求めません。」と言って、それを拒否した。一見、敬虔そうに見えるが、彼の中には主に頼り、信仰によってこの大変な状況を打開しようとするのではなく、自分の中に何か他に考えがあ

ったのではないと思われる。例えば可能性としてアッシリアに助けを求めるといふこと。そのようなアハズに対して14節「主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。」と言われ、しるしを拒むアハズに対して神の側からしるしを与えられた。ここに主のあわれみがある。そのしるしとは、「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」ということ。ここで大切なことは、主のことばとしるしということ。主のことばとしるしを通してインマヌエル（主が私たちとともにおられる）の事実を信じるかどうか。15節で「悪を退けて善を選ぶことを知るころまで」とは、おそらく物心がつくまでと解釈すれば、2～3歳とするなら、そのころまでにアッシリア軍によって国が荒廃する預言と考えられる。なぜなら、凝乳と蜂蜜は荒れ地の食べ物だから。実際に数年後にアラムが滅び、次に北イスラエル王国が滅びる。恐らくアハズは、主がしるしを与えられた結果とか預言の成就とは考えず、自分がアッシリアの王に助けを求めた結果であろうと考えたのだろう。（列王記第二16章7～9参照）結局、主のことばもしるしも彼は信じることなく、それはアハズにとっては何の意味もなかった。一方イザヤは、アラムと北イスラエルの滅亡は、まさに主がしるしとして与えた啓示の成就だと信じることはできなかったはず。そう考えると、主が与えられるみことばとそのしるしをどのように受け取るか、それを信仰をもって受け取るかどうかが問われているのです。

もう一度マタイの福音書1章18節に戻ると、マリアが聖霊によって身重になったことが分かった。それに対してどうすることもできず、どうすればいいのかわからず悩んで考えているヨセフの姿がここにある。それは、まるで神から離れ、この世にあって、また人生の中でさまざまなことが起こる中でどうしていいかわからず悩んでいる人々の姿と重なる。しかし、そのような人々の罪の姿、不信仰な姿、神を見失った状態とはいっさい無関係に主なる神は全人類の救いのためにひとつのしるしを与えられた。それがイエス・キリスト。それは、まずあくまで主が語られたことが成就した結果であ

り、このしるし、すなわち私たちの救い主としてこの地上に来られたイエス・キリストを自分の罪からの救い主として信じるならば、罪からの救いが与えられ、まさにインマヌエル＝神が私たちとともにおられるとの神の約束が成就する。実際に、21節に「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」とありますが、これがイエス・キリストの誕生の目的であり、すべてのクリスマスの出来事はこの目的のためになされたと言うことができる。

21節「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」ご自分の民とはユダヤ人のこと。この方が「ご自分の民」すなわちユダヤ人をその罪から救うということなのだろう。しかし、罪から救われなければならないのはユダヤ人だけではなく、すべての人が罪を犯したと聖書に記されていますので、イエス様は全人類の罪からの救い主と言える。そして信仰をもってイエス・キリストを罪からの救い主として信じるなら、誰であっても罪から救われ、永遠のいのちをもって歩むことができる。まさに、聖書を通して語られる神のことばと、神が人となってこの地上に来られて、十字架への道を歩まれ、最後に十字架にかかって苦しみ、血を流して死なれたイエス様を、神が全人類に与えられたしるしとして信じるか、それともアハズのように拒んで、自分の道を歩むのか。しかし、救いのために与えられたみことばとイエス・キリストというしるしを拒めば、もはやこれ以上の救いの道は残されておらず、永遠の滅びに向かうこととなる。

自分の罪をどうすることもできなかった私たちに一方的な恵みとして神はみことばとしるしとしての救い主イエス・キリストを与えてくださり、恵みと信仰によりインマヌエル（神が私たちとともにおられる）との歩みが実現することとなった。そのことをこの幸いなアドベントの時に私たちはともに主に心から感謝をささげたい。